

書評

西岡力著『わが体験的コリア論 —覚悟と家族愛がウソを暴く—』

李 青若 (ライター・韓国料理教室主宰)

韓国から見た日韓関係のリアル

西岡力氏の『わが体験的コリア論』は、どのような日韓関係を構築すべきかを考えさせられる本である。著者のスタンスの独自性は二点ある。一つは、日韓関係を日本と韓国と北朝鮮の三国関係として見る点だ。韓国には建国以来、北朝鮮の「影」がある。影しだいで韓国の日本観は変わる。二つめは、日本と韓国の上に信頼関係を築くことを目指す点だ。核を保有する敵対勢力と、対馬海峡を最前線に対峙することはあってはならない、という国防の視点がある。

400頁余の本書のテーマは、教科書や慰安婦など歴史認識問題をめぐる80年代以降の日韓関係史、そして拉致問題の二つだ。

まず教科書問題。1982年、日本の左派メディアが日本の歴史教科書の中国・韓国に関する記述が歪んでいるという誤報を流し、全斗煥政権が中国とともに日本に修正を求めた。だが実は80年頃、全斗煥政権は冷戦下での軍事協力を理由に、日本に経済協力を申し込んだが拒否されたため、歴史教科書問題を利用したところ日本政府は資金を拠出した、という話だった。

日本政府は教科書問題の原因となった誤報をなぜ誤報と言わず、カネを払ったのか。そもそも何を繰り返し謝罪したのか。西岡氏によれば、日本側が韓国に言うべきことを言わないのは話をしても通じない、しょせん対等ではない相手だと思っているからで、日韓関係とは日本が韓国をカネで何とかできていると思っている、蔑視と差別の関係だという。

そのような日韓関係のところ1991年、慰安婦問題が起きた。またしても日本政府は事実がはっきりしないうちから謝罪を繰り返し、それに著者は憤慨している。

慰安婦「問題」とは何か。著者は韓国で調査するうちに、北朝鮮の「影」を見る。元慰安婦を支援するという名目で、実は北朝鮮のシンパ・グループだった韓国挺身隊問題対策協議会という運動体が、日韓関係を悪化させるために慰安婦運動を煽動しているというのだ。著者によると、80年代から北朝鮮の工作によって、韓国では「反日反韓史観」が浸透した。この歴史観によれば、韓国は米軍を招き込んだ李承晩が作った米帝の植民地で、また日本陸軍の軍人だった親日派の朴正熙が作った間違った国家だが、北朝鮮は抗日独立運動の英雄・金日成が作った国家だから、民族としての正統性は北朝鮮にある。この歴史観に染まると韓国人が韓国を痛めつけ、北朝鮮の利益になるよう行動するという。日韓関係の悪化は、韓国の不利益になる。

一方、私の亡き父は朝鮮戦争を経験した保守派の在日コリアン一世で、「北のあのバカ

ども(金日成など指導者たち)を何とかしなければ」「あの時(朝鮮戦争時)北をつぶしておくべきだった」など、日常的に言っていた。父と同じ経歴の在日一世も、文在寅現大統領を「統一病だ。北のシンパだ」と言っていたが、これは保守派の朴槿恵前大統領がGSOMIA(日韓秘密軍事情報保護協定)を締結したにも関わらず、左派の文在寅現大統領は日韓が連帯して北朝鮮を敵国視するGSOMIAを破棄しようとしたことなどだ。ちなみに全斗煥氏以来、保守派の大統領は全員逮捕・収監されているが、朴槿恵前大統領も例外ではなかった。朝鮮戦争休戦とともに東西冷戦は始まり、同時に韓国ではイデオロギー戦争が始まったが、北朝鮮の工作により、韓国左派は一定以上の力を持って運動を展開している。

かつての韓国では、左派と敵対する反北朝鮮の「右派=保守派」こそ多数派だった。その頃の韓国人には、自分たちは冷戦の最前線にいるという意識があった。だが90年代後半以降の「冷戦が終わったのになぜ我々は分断されたままなのだ」という言説はともかく、合わせて言われていた「なぜ日本ではなく我々が分断しているのか」という言説は、今なお次期大統領候補李在明氏によって、選挙演説でも繰り返されている。これが著者の言う、「反韓反日史観」だ。

私の亡き父のような韓国の「右派=保守派」というのは、反共産主義かつ反北朝鮮、経済重視で自由主義、そして朝鮮民族という単位よりも韓国という国家を上位に置く価値観を持つ。一方、共産主義から反日反韓反米の朝鮮民族主義に路線を変更した北朝鮮は、国民を餓死させてでも軍事優先で韓国を呑み込もうとしている。これに準じるのが、韓国の「親北朝鮮や従北朝鮮の左派」だ。韓国左派たる反日朝鮮民族主義者と日本の反日左派が連帯して反日運動を盛り上げる中で、北朝鮮にコントロールされるがままに日本の右派たる嫌韓日本民族主義者が世論を先導して韓国を敵国視すれば、北朝鮮の思惑通り韓国右派は弱体化し、韓国左派ひいては北朝鮮(の軍事侵攻)によって韓国が乗っ取られてしまう。その時は、日本に敵対的な核保有国家が隣国にできる。

だから著者は、北朝鮮の工作に籠絡されて韓国嫌いになるよりも、韓国の保守派にモラル・サポートを行うことこそが、国防という観点から日本の利益だと主張する。ここで今一度日本人は、112年前に日本が朝鮮半島を植民地にした理由を思い出してみる必要がある。そして親韓派だの、著者が自称する愛韓派になる必要はないけれど、知韓派になる必要はある。日本に旧宗主国としての責任があるとすれば、それはやみくもに謝罪することではない。朝鮮半島のどこから聞こえてくる、誰のどんな声を聞いて、どうやってそれに応じるかだ。

本書から透けて見えるのは、韓国も北朝鮮も日本は戦時体制にある韓国の後方だと見なしているのに、日本はそんな後方意識を放棄していることだ。実際には1950年に朝鮮戦争が勃発した時、日本が韓国の後方支援基地だからこそ、日本の米軍基地からアメリカ軍が出動したし、海上保安庁からは掃海艇四十六隻が出たし、戦争特需もあった。ところが一九五九年以降、在日コリアンたち(大半が韓国出身者)が北送船で北朝鮮へ帰った、——日本が帰した。いきさつがあるにせよ、結果的に日本は戦争後に労働力不足で困っている北朝鮮に、約九万人を送って支援した。これ以降も後方意識を放棄した日本と、それを利用した北朝鮮とのコラボレーションによって日韓関係は脆弱であり続け、本書のテーマとなる80年代以降の日韓関係史に持ち越されていく。だが韓国「右派」は、日

本の後方支援を必要とする立場から、本来反日姿勢はとらない。韓国国内は、常に「アンチ反日の右派」と「反日の左派」がイデオロギーで争っている。反日姿勢をとっている韓国の「親北・従北の左派」が先導して日韓関係を悪化させるという構図の中に、著者は慰安婦「問題」の成立を見て取るのである。しかもこれで終わるとは限らない。あらゆる戦いはシンボリックなものをめぐって行われる。これからも別の過去の歴史で騒動が起きるかもしれないが、その時はヨシ来たと思って、マッコリでも飲んで気を落ち着けてドンと構えて、知り合いとヒソヒソと話題にしながらか、出来事に関する事実と問題の構造があきらかになるまで待つのがいい。

念のために言うが、「北に家族を人質にとられている」場合はまた別として、在日コリアンはマイノリティとして差別されてきたがゆえに、自分たちに温情的な左派の日本人のほうへ流れやすい。このような在日コリアンの左派的発言が、どれほど韓国の政治状況や日韓関係悪化による韓国の経済的打撃を理解した上でのものかは、おぼつかない。

北朝鮮による日本人拉致は、日本人になりすました北朝鮮の工作員が、韓国国内や日韓関係をかく乱する作戦遂行のために行われた犯罪だ。本書では日本と北朝鮮はもちろん、韓国やアメリカ、モンゴルなど登場する国も多彩ならば、アメリカ大統領や日本の首相など政治家、外交官、運動家、知識人、警察、テロリストなど、登場人物も多彩だ。また金正日以降の北朝鮮の政治や歴史のほか、コロナのせいで経済的にひっ迫する最新の北朝鮮情報をはじめ独自情報の収集、救出のための作戦やアメリカ政府への根回しの話などスリリングで迫力があり、日本政府が北朝鮮から人質を奪還するスペクタクル映画でも見ているような錯覚に陥る。そのような中でも、著者の筆致は当事者たちの愛と使命感に深く寄り添い、読む人の心に愛を届ける。テロリストが母親の愛を思い出して改心したり、横田夫妻の娘を思う愛に触れて、命がけで拉致は金正日の指令だと告白したり、テロリストと愛の組み合わせは不思議だ。故横田滋氏は、拉致された娘の実名を公表すれば証拠隠滅で娘が殺されるかもしれない恐怖心を抱えながら、救出するためには公表するしかないと決断し、家族会のメンバーたちも続く。自分の命を失うより怖いだろう、わが子の命をかける決断を下したのは、親の愛ゆえの責任感と使命感だ。著者自身も、愛ゆえの道徳的使命感からテロの恐怖を振り切って、拉致は金正日の指令だと、日本で初めて雑誌に書く。韓国保守派へのモラル・サポートの必要性を論じていた著者は、ここでは自身が被害者たちに寄り添うことで、問題解決への道筋をつけていこうとする。

最後に、在日コリアンの帰化経験者として付け加えておきたい。在日コリアンに関わる章で、帰化申請時に在日コリアンは「帰化の動機書」が免除になったことに対し、西岡氏は提出させるべきであると批判している。私は法務局の担当者から直接、不評だった動機書の提出はなくなったと聞いたが、実際ろくなものが提出されなかったと思う。私も書こうとしたが書けなくて、最後にとっておいたら申請時には不要になっていた、という経緯がある。実は少なくない在日が、「帰化の動機」の意味がわからない。このような在日の場合、むしろ自分が帰化しないで外国人として日本で一生を終えることのほうが、ピンと来ない。私の場合、マレーシアを旅行中、タクシードライバーが日本の植民地だったころの話を始め、その時日本の歴史を自分の国の歴史として受け止めようと思ったというきっかけがあった。日本という共同体に責任を持つと決めて帰化したのだが、これは「動機」というよりも「きっかけ」のような気がしたし、帰化するのに動機がいるのかと思った

ような気すらする。帰化申請する在日コリアンには、無国籍だとか、日本国籍がないと仕事ができないとか、人それぞれ理由があるのだが、それが「動機」か「きっかけ」かは人によるし、このふたつの区別をしない人もいる。ここでは私のようにB5サイズの「帰化の動機書」の用紙を見せられて、動機と言われてもどうすればいいのだと困惑し、ましてやこの用紙を埋めなければならないのかと、頭が真っ白になった在日コリアンについて話す。

とにかく合格点をとりたい一心で、日本人になりたい外国人の立場に立って帰化の動機を考えているうちに、正気を失う在日が続出した。私も気が触れてしまい、日本好きのアメリカ人像が思い浮かんで、「アイラブジャパン」という言葉が脳裏をよぎるありさまだった。そんな在日コリアンが「外国籍のままでも生活は変わらない、のに（日本国籍がとれて）「なんか、ホッとした」と口々に言い、なぜホッとしたのかと、本人たちも首を傾げて不思議がった。

安堵の理由を、言語化できた私が代弁する。それは当事者の意識に上ることすらない、日々の暮らしに対する愛着をめぐめるものだ。私のような昭和の人間ならば、床屋のおっさんや煙草屋のばあちゃん、近所のお節介なおばちゃん、かっこいい酒屋のあんちゃん、むかつく上司や親切な同僚、目をかけている部下、親友、部活の先輩後輩、幼なじみ、恩師、駅員さんや郵便屋さんなど日本人に囲まれて、満員の通勤電車、行きつけの喫茶店、いつものデートコースなど、日本でのとるに足りない生活を愛している。そこには信頼がある。帰化後の「なんか、ホッとした」は、自分はこれでいいのだという肯定感とともに、この暮らしを守れた、これからも守れるという安堵感が、意識の奥底から意識の表層まで一時的にふわっと浮き上がったものだ。ここには責任意識がある。当事者には意識されていないが、帰化の動機の根底にあるのは、自分が生きている世界を周囲の人々と同じように守る責任を持ちたい、フルメンバーのメンバーシップを持たない疎外感と緊張感から自由になりたい、という思いだ。

韓国育ちの多重国籍者の韓国人青年には、友だちがみんな徴兵に行っているからという理由で、韓国籍を選択して徴兵に行く人々がいる。この青年たちが、韓国籍を選んだ動機を書いて役所に提出しなければならないとしたらどうだろう。ピクニックに行くのではないぞ、軍隊とは国家を守る崇高な組織で忠誠心が云々と、青年たちに説教する人もいるかもしれない。だが、彼らのコミュニティーの一員であろうとするアイデンティティーだけで十分だと軍の幹部は認め、またそんな青年たちを直接まとめる隊の上官も、ウムそれでよろしいとうなずくのではないか。この青年たちと、帰化に安堵する在日コリアンたちの気持ちは同じだ。この原稿を書いていて思い出したのは、私がマレーシア旅行中に日本という共同体のメンバーとして責任を持とうと思う直前、友人の顔が脳裏をよぎったことだった。

きらきらした思い出がある。高校時代に友だちとワルさしてみんなで停学をくらったとか、離婚してドツボにはまっていたら同僚がドンチャン騒ぎを企画してくれたとか。在日コリアンに適切な「帰化の動機書」は、「日本におけるあなたのくだらなくてもかけがえのない思い出と日々の暮らしについて書きなさい」という、半生の自叙伝だ。

法務省は在日コリアンに、「動機書」のほか「在勤証明書」「給与証明書」「最終学歴を称する書面」「宣誓書」も免除した。法務省が在日コリアンの日本国籍取得を、戸籍の作成に特化していることがわかる。在日コリアンの現実に照らし合わせた場合、私はその方針で

いいと思っている。ただ西岡氏は宣誓書の免除にも批判を向けていて、それには同意できる。

国籍には命がかかっている時がある。1996年、在ペルー日本大使公邸占拠事件があった。人質の中には、某日本企業の社員だった在日コリアンがいた。その人がとっさに考えたことは、自分の身柄は日本大使館と韓国大使館、どちらの管轄なのかということだ。国籍は命がけで選択・取得しなければならない側面を持つ。適切な宣誓書は、国籍を取得する上で最低でもけじめだ。宣誓書の文面を読んでサインをし、提出するという一連の行為には、自分の意思を公に宣言するという重要な意味がある。

(モラロジー道德教育財団、2021年刊)